

第4回会議 委員意見(原文)

一戸委員

No.	視 点	意 見
1	(3)地域コミュニティ／連携・協働	行政や学校、地域に存在するそれぞれの分野に特化したNPOやコミュニティが、平常時から連動している地域であること。地域住民にとって手の届く範囲(距離)の様々なNPOやコミュニティ、専門家、がまずは顔の見える関係になって繋がり合い、地域にどのような人々がいるかを知り、それぞれの強みお互いが把握したり助けたりできる地域。
2	(2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ／連携・協働 (5)防災活動・被災時の活動	ひとりひとりが顔の見える関係ではなくても、地域住民がまずは自分の所属する(関わる)場にアクセスすれば、そこを通じて他の人々とも繋がり合える(助け合える)システムがあること。
3	(2)情報共有・情報リテラシー (4)リーダー・担い手	その為に、各団体(専門家)の要になる人や、それを繋ぐ役割の人がいること。要となる人々が情報を共有し(メーリングリスト、掲示板など)必要な人々に的確な情報を発信できるシステムがあること。
4	(3)地域コミュニティ／連携・協働	地域住民個々の関係性は希薄であるが、一方で細やかなニーズに応じて色々なNPOや団体が立ち上がっている。しかし、それぞれの横のつながりは薄いので、どの地域にどんな団体があるのかを把握して繋がりを作り地域の強みや課題を網羅できる、プラットフォームのような場がある地域になることが理想的。
5	(1)学習・教育 (3)地域コミュニティ／連携・協働	学校教育と社会教育の繋がりもとても重要であると感じる。 マイノリティの問題など、学校で考える機会があることで、それについて考えたことや感じたことを、親など周囲の大人へも発信され大人の意識が変わるという例も身近にあった。子どもがいつもと違うことが起きた時、困った時にどう考えてどう行動するかを考えることがとても大切であり、大人も共に考える機会となることも多い。(日常から様々な体験をしたり、普段出会うことができない人々と出会い色々なことを考えるきっかけとしては、サタデースクールはとても有意義で、教員以外の力を借りてもっと広まればと思う。)日頃から、子どもの考える力を生かすことができる地域であることは大きな強みになると思う。
6	(2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ／連携・協働 (5)防災活動・被災時の活動	困っている人や援助が必要な人、また援助のために動ける人を把握し、必要な場に必要な援助が届くネットワーク、情報共有システムが構築されていること。
7	(3)地域コミュニティ／連携・協働 (5)防災活動・被災時の活動	行政や民間団体の支援を受けることができる避難場所や待機場所が身近にある地域。その場所が単に物資の支給や場所の提供にとどまらず、集まった人々でこれからのことを考えたり助け合ったりできる場となること。
8	(6)多様性と社会的包摂	ソーシャルワークが機能すること。

第4回会議 委員意見(原文)

臼井委員

No.	視 点	意 見
9	(5)防災活動・被災時の活動	地域で起こりえる災害について、住民がある程度の知識を持ち、模擬体験や避難訓練 を重ねている地域。
10	(2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ／連携・協働	自分たちの住んでいる地域の住民特性やライフスタイル、家族構成、年齢構成、健康状態などを、住民がある程度理解している地域。
11	(3)地域コミュニティ／連携・協働	住民が日常的に気軽に挨拶し合い、適度なコミュニケーションが取れて、日常的な困り事でも相談できる人たちがいる地域。
12	(3)地域コミュニティ／連携・協働	住む人たちの緩やかな繋がりができていて、まわりから疎外された人がいない地域。
13	(2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ／連携・協働	住民がある程度の情報リテラシーを有し、公共に配慮する人が多く住んでいる地域。
14	(3)地域コミュニティ／連携・協働	内外の複数の地域と友好関係を築き、困ったときには協力・助け合いを行える地域。
15	(5)防災活動・被災時の活動	災害発生時に、住民が慌てず、迅速に必要な行動(避難、声掛け、協力、助け合い etc.)をとれて、それぞれの役割を果たせる地域。
16	(3)地域コミュニティ／連携・協働	近所の人たちの暮らしぶり(ライフスタイル、健康状態、生活の価値観)を理解し合っている地域。
17	(3)地域コミュニティ／連携・協働	近隣に自分のことをよく知っていて、いざというときには頼れる人たちがいる地域。
18	(4)リーダー・担い手	被害を受けた近隣の人たちの精神的支柱になれるようなリーダーが誕生する地域。

第4回会議 委員意見(原文)

佐久間委員

No.	視 点	意 見
19	(1) 学習・教育	地域課題についての学習機会が提供され、問題意識の共有を図っていること。
20	(1) 学習・教育	地域課題への理解や解決に向けての学習機会(協議の場等)が設けられ、住民の積極的な参画があること。
21	(3) 地域コミュニティ/連携・協働	地域に存在する組織の横断的な会議が定期的開催され、連携・協力できるネットワークがつけられていること。
22	(1) 学習・教育 (2) 情報共有・情報リテラシー (3) 地域コミュニティ/連携・協働	地域行事が定期的開催され、住民の参加率が高い地域。
23	(1) 学習・教育 (3) 地域コミュニティ/連携・協働 (2) 情報共有・情報リテラシー	以下の目的を持った社会教育事業が活発に実施展開されていること。 ・ 在住者を知るとともに、相互交流を促進する事業 ・ 世代間の交流を促進する事業 ・ 地域課題をテーマとした事業
24	(5) 防災活動・被災時の活動	災害時に中心となって対応する組織が明確となっている地域。
25	(3) 地域コミュニティ/連携・協働 (5) 防災活動・被災時の活動	災害時に必要となる住民の情報が共有されている地域。
26	(5) 防災活動・被災時の活動	災害時の住民一人一人の行動や役割が明確となっている地域。
27	(2) 情報共有・情報リテラシー	情報の収集及び提供の仕組みが構築されている地域。
28	(5) 防災活動・被災時の活動	自助、共助、公助についての役割分担が明確であり、住民が理解している地域。
29	(5) 防災活動・被災時の活動 (3) 地域コミュニティ/連携・協働	災害時の対応組織及び住民一人一人の行動や役割が明確となっていることが大切だと思います。但し、組織は災害のためだけに限定したものであれば、活動が次第に停滞してしまうことが懸念されます。平素から日常的に活動している既存の組織が、この役割を担うように位置づけるのが良いように思います。
30	(1) 学習・教育 (3) 地域コミュニティ/連携・協働 (4) リーダー・担い手	短期的な視野だけではなく、長期的な視点をもって社会教育行政の役割を考えることも必要ではないかと思えます。特に、子どもたちが情報リテラシーや社会的包摂等についての考え方を身に付けておくことは、将来地域の担い手として災害時に有効なことではないかと思えます。
31	(3) 地域コミュニティ/連携・協働	災害時には、地域のみで危機状態を脱することは至難だと思います。地域外から、必要な支援や協力を迅速に得ることが災害からの立ち直りに重要ではないでしょうか。そのためにも、閉ざされた地域ではなく、平素から開かれた地域を目指すことも大切ではないかと思えます。他地域との交流促進やつながりを深める取組も必要ではないかと思えます。また、若年層は、地縁を超えた多様なつながりを持っていると思えます。こうしたネットワークも災害時の重要なツールとして活用できるのではないのでしょうか。
32	(1) 学習・教育 (3) 地域コミュニティ/連携・協働	「災害に向き合う地域」について、社会教育行政の役割を考えると、「①人を育てること」と、人の集まりである「②地域を育てること」の二つの側面からアプロー

第4回会議 委員意見(原文)

		<p>チすることだと思えます。①は、「自助」であり、②は「共助」ともいえます。住民の手によって、一人一人の意識と行動を変え、共助が機能するように住民が地域を育てる営みを支援することこそ社会教育行政の役割であるように思えます。</p>
--	--	--

第4回会議 委員意見(原文)

鈴木委員

No.	視 点	意 見
33	(3)地域コミュニティ／連携・協働	<p>平常時から、お互いに「顔の見える関係づくり」、「近所づきあい」がある地域。</p> <p>→ 地域住民全員が顔の見える関係である地域が理想的であるが、その段階に至るまでは、地域で様々な形での繋がりがあってよい。</p>
34	(1)学習・教育 (5)防災活動・被災時の活動	<p>D I G・HUG等、直接的な災害学習だけでなく、社会教育、生涯学習が広く様々な形で行われている地域、あるいはそのような意欲の高い(人が多い)地域。</p>
		<p>「共助」の段階において、以下のような地域であることが望まれ、それが「地域力」「災害対応力」に繋がると考える。</p>
35	(3)地域コミュニティ／連携・協働	<p>避難(必要)時に、近所の避難行動要支援者(高齢者、障がい者、小さな子どもがいる家庭、外国人等／どのような状況の人が避難時に困っているかを気づくことが重要)を含む避難弱者の存在にいち早く気づき、声かけやお手伝いのできる人が多く暮らしている地域。</p>
36	(2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ／連携・協働	<p>居住地域周辺の小(中)学校区程度の範囲における(避難時に)必要と思われる地域の情報(<公的な避難情報に加えての>即時避難の重要性、避難所の状況、支援物資到着情報、地域の状況など)を近所づきあいの中で共有できる地域。</p>
37	(5)防災活動・被災時の活動	<p>お互いに「自助」では賄い切れず困っていることを、補完し合うことができる(例えば、大規模停電時には水の運搬、充電<発電機、通電している家庭の人が通電していない家庭の人の携帯などの充電等>)地域。</p>
		<p>地域に以下のような人が多く存在する地域。</p>
38	(1)学習・教育	<p>地域の様々な情報(要避難行動支援者の他、避難所の位置、避難経路、地理的状況<危険箇所、高低差、河川の氾濫危険度等>)を知っている家庭・人が多い地域。</p>
39	(1)学習・教育	<p>災害発生時に「どのような行動をとるべきか」「地域でどのようなことで困るか」「地域のどのような人たちがどのようなことで困るか」等、知識・体験として持っている地域。</p>

第4回会議 委員意見(原文)

辻委員

No.	視 点	意 見
40		<p>1と2、あわせて以下に記します。</p> <p>まず、「災害からいち早く立ち直る」ということについて考えました。一般的に災害とは、すべての人に「平等に」苦しみを与えるとは限らず、実際には、きわめて悲惨な状況になる人と、比較的早く回復し日常を取り戻せる人とがいるように格差や温度差を生じさせます。2018年の胆振東部地震の時も、同じ札幌でもほとんど被害がなくすぐに日常生活に戻れた人ともいれば家が傾いたり崩れたりして日常生活がなかなか取り戻せない人がいました。家族を亡くした人にとっての「立ち直り」は、家族を亡くさずにすんだ人にとっての「立ち直り」とは、同じではなく、むしろ同じであってはならないでしょう。もっと言えば「いち早く」立ち直る(ように見える)ことが、長い目で見て、本当の意味で「立ち直る」ということなのかどうかもよくわかりません(立ち直りを急がない方が、実はたち直ることの近道かもしれないということ)。一人ひとりにとっての災害の経験には、当然、個人差がありますから、まずはそれを踏まえることを念頭に置く必要があると考えました。</p>
41	(5)防災活動・被災時の活動	<p>その上で、「災害からいち早く立ち直ることのできる地域」とは、どのような地域かと言えば、災害前の生活や被害の状況が様々であったとしても、地域住民だれもが「等しく」、そして「早く」、安全・安心に過ごせるようになること、基本的な生活を「早く」取り戻せることだと考えられます。この点に関しての「地域」は、札幌市(あるいは区)という行政単位の果たす役割が大きいと考えます。そもそも行政としての地域(札幌市)は、そこに住むすべての住民が、安全・安心に暮らせるよう、環境を整えたり、制度を準備したりするためにあるわけで、平時も災害時も、その役割はたいへん大きいと言えます。発災直後こそ、まずは個人が自分で自分の身を守るとしても、その次の段階になると、避難所を開設し最低限の衣・食・住(寝るところ)を確保することや、罹災証明書を速やかに発行すること、仮設住宅を用意することなど、個人や民間ではどうしようもないこと、行政がやらなければならないことが数多くあります。私たち市民は、そういう非常時にこそ、行政にちゃんと動いてもらうために、平時から知恵と意見を出しあう必要があります。このような意味で、「被災からいち早く立ち直ることのできる地域」であるためには、行政(札幌市)こそ、しっかり準備してほしいと思います。具体的には、これまでに既に災害を経験した地域(行政)から学んできてほしい、そしてそれを市民と共有してほしいと強く思います。(こういう災害が、このように起きると、こういう事態が予想され、こういう困ったことになると考えられる、それに対してこれまでの経験では、こういうことが役にたった、こういうこともできた、こうすればよかった、などなど)</p>

第4回会議 委員意見(原文)

42	(1)学習・教育 (7)その他	<p>他方で、もちろん行政だけが「立ち直ることのできる地域」を背負うわけではありません。私たち一人ひとりもきっと「何とかして立ち直りたい」と強く思うことでしょう。しかし、実際には、特に大きな被害を受けていれば、以前と同じ生活をいとむことは現実的に難しく(亡くなった人は戻ってこないし、過ぎ去った時間は元に戻せない)、「とても立ち直れない」と思うかもしれません。そんな時、どこかの時点で、「前とは違う、新しい生活をつくっていく」しかないのだなと気持ちを切り替えざるをえないのだらうと思います。そう考えると、「立ち直ることのできる地域」とは、「立ち直り」ながら、以前とは異なる新しい地域をつくってゆく、ということになるのではないかと考えます。</p>
43	(6)多様性と社会的包摂	<p>災害が発生した地域で起こる問題とは、災害発生時以外の日常において生じている問題が、極端な形で現れたもの、より凝縮された形で現れたもの、とも、とらえることができると思います。高齢で体が不自由だったり、障害があつて避難放送が聞き取れなかったり、日本語が通じなくてどう行動していいかわからなかったり、避難所に行っても安心して寝たりトイレに行ったり着替えたり洗濯したりできなかったりといった具合に、です。もし、平時に、高齢で体が不自由であっても日常的に他者と関わりを持ちながら社会生活を楽しんでいたり、障害があつて耳が聞こえない人も「普通に」「あたりまえに」地域の中で生活していたり、日本語を母語としない住民も日本語を学ぶ機会があつたり、看板やお知らせや回覧板やラジオ放送などで誰もがわかりやすい日本語(ふりがななど)や多言語使用が日常的にあつたりすれば、災害時(非日常)の問題は一定程度軽減されるかもしれません。女性も安全・安心して過ごせる避難所にするためには、避難所運営の運営者や意思決定者の中に女性(や様々な属性の人)が入っていることが不可欠ですが、これは災害が起きたからといって急にできるわけではなく、やはり災害以前に実践されていることが生きてくるはずです。</p>
44	(6)多様性と社会的包摂	<p>このように考えてみると(一つひとつのトピックについてではなくて)、極端な形、凝縮された形で表出してきたものと出会うこと(=災害時の経験)は、日常を見直す契機(=学習の機会)になりえます。非日常(災害)という経験からの学習は、日常を問い直し、日常の中での私たちの目線(人やものや世界をみる見方)や言葉や行動を、変えることにもつながる可能性があります。(体が不自由だと外に出にくくて家に閉じこもって生活しているのだな、それには車いすで通りにくい道路や乗りにくいバスがある、困ったときに手を貸す人がすぐ隣にいない、体が不自由だと生きにくい状況があるのだな、など)</p>
45	(1)学習・教育	<p>要するに、体験を「学習」にする。そのための装置(しかけ)や環境をつくることがとても大きな意味を持ち、これこそが社会教育行政の役割ではないかと考えられ</p>

第4回会議 委員意見(原文)

		<p>るということです。</p>
46	<p>(1)学習・教育 (2)情報共有・情報リテラシー</p>	<p>体験した時に感じたことや気付いたこと、驚きや戸惑いや感動や後悔を、対象化する(「その体験」について、ちょっと立ち止まって考えてみる、あれは何だったのか、ほかの人はどう感じていたのかを共有する)ことが無ければ、一時的・個人的なものとして過ぎ去ってしまうかもしれません。</p>
47	<p>(1)学習・教育</p>	<p>体験を立ち止まって眺めるきっかけは、いわゆる様々な社会教育活動の中にちりばめられていると思います。言葉や文字、絵や写真、動画・映画、音楽、踊り、芝居など、表現活動は、その一つでしょう。それらを共有する場をしかけていくようなことができれば、きっと「被災からいち早く立ち直ることのできる地域」につながるものと考えます。</p>
48	<p>(1)学習・教育 (2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ/連携・協働</p>	<p>平常時の地域での取り組みとして以上を踏まえて具体的な提案をするなら以下です。</p> <p>(1) 甚大な災害に見舞われた他の地域の経験から学ぶ場や機会をつくること(成功も、失敗も含めて。行政職員も市民も一緒に)</p> <p>※ 水害、地震、津波、あるいはコロナウイルスもある種の災害かもしれませんが、現在、私達が直面している事態は、すでに人類が長い歴史の中で何度も繰り返してきたことでもあると言えることから(例えば、ペスト、コレラ、エイズウイルスなどなど)、今ほど「過去の経験」から学ぶことが重要な意味をもつ時はないと感じています。新たなウイルスが発生すると、世界や世の中がどうなるのか、どういう事態が発生するのか、という経験知があるので、それを知ること「今」への見方の幅が広がると思います。</p> <p>(2) 災害を体験した人たちが、何らかの形でその体験を表現し、その表現を共有する場をつくること</p>

第4回会議 委員意見(原文)

土田委員

No.	視 点	意 見
49	(5)防災活動・被災時の活動	自主防災組織等が防災訓練を行っている。
50	(1)学習・教育	日頃より地域住民が地域の特性(土地、建物、住民等)について理解している。また、理解に努めている。
51	(2)情報共有・情報リテラシー	地域住民同士が情報共有を正確に確実に行える仕組みがある。
52	(3)地域コミュニティ/連携・協働	地域住民同士の交流が活発である。
53	(3)地域コミュニティ/連携・協働 (5)防災活動・被災時の活動	災害時の自治をスムーズに行えるよう、地域に自主防災組織等の地域内での組織があり機能している。(町内会のような組織も同様の効果があると期待できる。)
54	(2)情報共有・情報リテラシー	地域住民一人ひとりの情報活用力(情報リテラシー)が高い。
55	(6)多様性と社会的包摂	地域住民一人ひとりが多様性について理解し、多様な人々への対応能力が高い。
56	(3)地域コミュニティ/連携・協働	行政に精通し行政とのつながりを密に行っている。
57	(3)地域コミュニティ/連携・協働	札幌(大都市)特有のプライバシー意識の高さに対応した人間関係が構築できている。
58	(5)防災活動・被災時の活動	災害について準備がされている。
59	(1)学習・教育 (3)地域コミュニティ/連携・協働 (5)防災活動・被災時の活動	災害発生直後の被害について住民同士が(共通理解として)ある程度予測ができる。
60	(1)学習・教育 (3)地域コミュニティ/連携・協働 (5)防災活動・被災時の活動	住民同士が共通の被害拡大(二次災害等)の予測ができる。
61	(3)地域コミュニティ/連携・協働 (5)防災活動・被災時の活動	住民同士がお互い助け合い避難することができる。
62	(5)防災活動・被災時の活動	避難(所)の生活(自治)がスムーズに行える。
63	(2)情報共有・情報リテラシー	地域住民一人ひとりが正しい情報を的確にとらえ、適切な行動が行える。
64	(6)多様性と社会的包摂	一人ひとりの多様性に対応した避難(所)生活ができる。
65	(3)地域コミュニティ/連携・協働	行政の援助を効率よく利用できる。
66	(5)防災活動・被災時の活動	プライバシーにも十分配慮した避難(所)生活が行える。

第4回会議 委員意見(原文)

原田委員

No.	視 点	意 見
67	(2)情報共有・情報リテラシー	リスクコミュニケーションを絶やさない(市民同士、行政と市民、専門家と市民などの組み合わせはもちろん、専門家と行政が発信するメッセージをさらに適切に翻訳し市民に届けることができるリスクコミュニケーション・科学コミュニケーションの専門家が必要ではないか。そうしたリスクコミュニケーションの専門家と市民の対話が日常時からあると非常時の信頼にも繋がる。社会教育的に実行できる有力な分野のひとつ)
68	(7)その他	あらゆる仕組みに冗長性を持つ(ギリギリの人数で回さない。有事の対応に差が出る)
69	(2)情報共有・情報リテラシー	情報弱者を作らないための取り組み(信頼性の高い情報を発信する公的機関のサイトなどを見慣れておく等。孫世代が祖父母世代に教えるような方向性だと世代間交流も兼ねられる。小学校で一人暮らしの年配の方に手紙を送る取り組みが市内の小中学校でもあるが、たとえば同じことを電子メールやメッセージアプリで試してみるなど)
70	(1)学習・教育	今回の COVID-19 の流行では公衆衛生概念の重要さが市民に浸透しつつある。自然災害でも避難所の感染症拡大は災害が起きるたびに上げられるトピックでもある。災害は避けられないものとして、起きた災害からケーススタディとして学び、また過去の災害から繰り返し学び続けるのを止めないことが重要
71	(2)情報共有・情報リテラシー	間違った情報の拡散をしない、したとしても訂正機能が働く、情報リテラシーの高い地域
72	(2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ/連携・協働	対話や情報交換を絶やさない地域
73	(7)その他	災害時に最大の障害となりうる、不安に駆られた過剰な行動を早期に是正することができる地域(今回で言えば買い占め等)
74	(3)地域コミュニティ/連携・協働	弱い立場にある人を常に気にかける余裕のある地域
75	(2)情報共有・情報リテラシー	インターネットを介した情報インフラが整備されている地域
76	(6)多様性と社会的包摂	あらゆる人間に人権があることを忘れない地域(助きたいマイノリティと助けたくないマイノリティ、のような選別をしない)
77	(6)多様性と社会的包摂	それぞれの立場を想像し、層ごとに対立するのではなく、「自分の持たない新たな視点を得られる相手」と他人を尊重し合うことができる地域(違う年齢層の対立、違う所得層の対立等々)

第4回会議 委員意見(原文)

牧内委員

No.	視 点	意 見
78	(3)地域コミュニティ／連携・協働	平常時に関して、地域の学校関係者(教頭が窓口)が地域の会合等に積極的に参加し防災対策や対応について知ることひとつと思う。学校以外に地域にはどういった施設設備があり、どのような住民が居住しているのか等。町内会組織の方々と顔見知りになることが大切でした。
79	(3)地域コミュニティ／連携・協働	中央区(集中豪雨)、豊平区(ブラックアウト)で勤務(学校)していた際、学校が避難場所として開設になった場合、一般的には学校管理を任されている教頭が駆け付けるわけですが何よりよりどころになったのは「町内会」の動きでした。 当時区役所の方々も派遣され駆けつけてはいただけたのですが、何より実際の動きや避難された方々の調整に関しては地域性をよくわかっている方々の対応が心強かった。

第4回会議 委員意見(原文)

安田委員

No.	視 点	意 見
80	(3)地域コミュニティ／連携・協働	地域社会から取り残される人が出ないように地域に存在する多様なコミュニティ(福祉施設、学校、行政機関、民生・児童委員、市民活動団体など)が繋がりがあうことが重要になる。
81	(2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ／連携・協働 (4)リーダー・担い手	かつ、日頃から主要機関と繋がり情報共有をし、緊急時にリーダーシップをとれる人材や団体が存在する必要がある。(現代では町内会の機能は弱い)
82	(3)地域コミュニティ／連携・協働 (4)リーダー・担い手	社会教育であるサタデースクール事業など現存する資源を有効に活用するとともに、地域の人たちと関係機関をつなぐ社会協議会の役割を見直し、そこに所属する地域福祉コーディネーターの育成と増員が必要だと考える。
83	(4)リーダー・担い手	平常時から防災意識を持ち、緊急時にリーダーシップをとれる人材や団体が存在する地域。
84	(3)地域コミュニティ／連携・協働	人との関わりがなく情報に乏しい人、身体不自由で単独で避難が困難な人、共働きやひとり親世帯で自宅に残されている子ども、精神疾患により避難所など多くの人が集う場所に馴染めない人、発達障害などにより緊急時の状況に順応できない子ども達など、地域との繋がりが薄く、情報が乏しい人達を取り残されないように地域の人たちが声を掛け合える顔の見える関係性が構築されている地域。

第4回会議 委員意見(原文)

山口委員

No.	視 点	意 見
85	(2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ／連携・協働	<p>地域の中で、顔が見えるつながりをつくっておくことが重要だと思います。</p> <p>札幌は人口も多く、転勤族は常に出入りするため深い付き合いは難しいかもしれませんが、それでも、どういう人がどういう家族構成で暮らしているのか、ある程度みんな把握しておくことが大事だと思います。</p> <p>今の時代、SNSで友人たちとつながって支えあえることは、寂しさも紛れ心強くもあり、とても便利なことです。</p> <p>それはそれで情報収集などに使えるので大変重宝しますが、本当に困ったとき助け合えるのは遠くの友人ではなく、近くの他人なのではないでしょうか。お互い顔を知っているだけで、いざというとき「ちょっとお水を分けてほしい」、「怪我をしたので薬を分けてほしい」などのお願いがしやすくなると思います。</p>
86	(2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ／連携・協働	<p>地域の一部の人たちから始まって、やがては多くの人たちと、その地域にある施設(老人ホーム、保育園、病院など)の確認や、ひとり暮らし、母子家庭の把握、外国人観光客にはどうしたらいいか、などいろんな人たちが自由に話し合える「空間」をみんなで作ることが必要だと思います。そして「口を利いたことはないが、あの人はいつも優しそう」、「若いのに子どもがたくさんいて大変そうだけど、楽しそう」。そんなふうに、他人へプラスの関心を持ち合える空気が必要だと思います。</p>
87	(3)地域コミュニティ／連携・協働	<p>避難所で自立できない人はその後、仮設住宅に移っても人間関係がうまく構築できず孤立してしまい、なかなか元の生活に戻れないと聞きました(南三陸町語り部 伊藤俊さんのお話です)。であるならば、そういう人を作らないようにはまずは、知らない人にも挨拶ができる地域づくりが重要であると考えます。都会は人とかわるのが苦手と感じている人も多いと思いますが、それでもいいのです。そんな人が「ここ」にいるという認識だけでも違うと思います。一番怖いことは、他人に無関心になることです。かかわろうとしない人を切り捨てるのではなく、見守る意識が必要です。</p>
88	(1)学習・教育 (3)地域コミュニティ／連携・協働 (5)防災活動・被災時の活動	<p>また、何でもそろっていて便利な街は、一人でも生きていけると錯覚してしまいます。しかし、災害というのは非日常です。当たり前前の方が当たり前前ではなくなったとき、こんなはずではなかったとろたえる事がないように、平日頃からなにかしらの啓発活動と、人と人とを繋げる活動を地域ごとに行うことが理想であると思われまます。</p>

第4回会議 委員意見(原文)

89	(1)学習・教育 (2)情報共有・情報リテラシー (3)地域コミュニティ/連携・協働 (5)防災活動・被災時の活動	災害時、季節や地域の特性、家族構成、持病の有無などによって各家庭必要とするものはさまざまです。 実際、被災してみないとわからないことも多く、災害について常に話し合ったり情報収集や情報交換を意識して行っている地域は、そうでない地域と比べると立ち直りが早いと思われます。
90	(3)地域コミュニティ/連携・協働	長期にわたっての避難所暮らしは、必要物品や食事の面だけじゃなく、集団生活のルールや医療と健康維持、ペットの世話についてまで考えなくてははいけません。そういったことを常に話し合い、協力し合って準備してきた地域は行動も早く、自信を持ってみんなで励まし合いながら克服できるのではないのでしょうか。